高岡健次郎教授退職記念号によせて

札幌学院大学人文学部長
人文学会長　杉　山　吉　弘

2000年３月，私たちは人文学部のみならず大学全体に大きな貢献を果たしてきた高岡健次郎先生をお送りすることとなった。私の気持を含めて率直に言うなら，高岡先生は私たちの精神的支柱であった。先生の発言には，立場のちがう者も含めて，誰もが耳を傾けた。その発言の力はどこに由来したのか。一つは，たえず公正な立場から条理立った議論を尽くされていたこと。二つに，たとえ意見のちがいがある場合でも，議論によってなんらかの結論に導くことができるはずであるという信念。そのような先生の姿勢のうちに私が感じていたものは，的外れであることをおそれずに言えば，精神的であれ肉体的であれいかなるささいな暴力をも拒否する堅固な思想であったと思う。

私のような若輩が同じ学部に職を得て初めて先生にあったときには，先生はすでに日本におけるエスエル研究の第一線に立っておられた。そのことを耳にしたのは，北海道大学スラブ研究センターに所属する知人からであった。先生は同センターの研究員を長い間兼務してこられた。先生は革命期ロシアの左翼エスエル研究の先頭に立ち，その問題に関する我が国の研究のいわば種を播き，先導しておられた。先生にはそのほかにレーニンやスターリン問題に関する共著がある。ソ連邦とソ連型東欧社会主義政権は20世紀末に崩壊した。これは私たちが今生きているいわゆる「冷戦後」の時代を規定する重大な歴史的出来事であった。その出来事のもつ歴史的な射程はどのようなものなのか。これまで革命期ロシアの研究に打ち込んでこられた先生はいかに考えておられるのか。私のような畑ちがいの浅学にとっても，先生に教えていただきたいことが一杯あるように思われる。

本学がまだ札幌商科大学を名のっていた1977年に人文学部が創設されるが，先生はそのときの初代人文学部人間科学科長であった。また，1989年から４年間，札幌学院大学人文学部長の任にあった。先生は，文字通り人文学部の精神的支柱として学部の民主的な運営に専心され，今日の人文学部を支えてきた。先生は，ときとして軽々しく使われる「民主的」という言葉にとても注意深ったように思われるし，身をもってその大切さを伝えておられた。そして，そのような先生の姿勢が，私たち人文学部教員のあいだにいつのまにか深く根づき，学部の貴重な伝統として今日に生きづいていると思われる。本当にありがとうございました。

最後にこの巻頭言をかりて，先生が私たちの大学と学部，そしてその学生たちのために尽くされた長年のご苦労に改めて感謝を述べるとともに，今後の活動のご発展を祈念いたします。